

聖書：ルカの福音書 13 章 1～9 節

説教：だれが罪深いのか

1 大きな事件や災害が起きると

二年前に大きな地震とその後に襲って来た津波災害が起こったとき、ある方があれは天罰が下ったのと言ったことがありました。二千年前のイスラエル、イエスの時代にもまったく同じように考える人たちがいました。ここでは二つの事件のことが取り上げられています。

一つ目は、当時イスラエルを実質的に支配していた提督ピラトが、ガリラヤ人を殺害し、その血をささげ物の動物の血と一緒に混ぜたという事件のことです。ピラトがガリラヤ人を殺した理由はわかりません。当時の人たちはこの事件に接して大きなショックを受けました。どんな事情であれ、殺された者の血を動物の血と一緒に混ぜることは、人間の尊厳を大きくそこなうことです。あつてはならないことです。加えて、自分たちが大切にしているいけにえがそんなふうに扱われてしまったことに強い憤りを覚えました。これは推測ですが、おそらくピラトは見せしめという意味でそういうことをやったのでしょう。

そんなとき、多くの人たちは考えます。ガリラヤ人たちがこんなひどい目に遭うのは、きつと何か理由があるはずに違いない。何か悪いことをしたのでその神罰を受けたのではないか。そんなうわさが飛び交いました。

二つ目は、エルサレムにあったシロアムの塔が何らかの理由で崩れ、たまたまそばにいた十八人が亡くなったという事件です。事故

に巻き込まれたのは、地方からエルサレムの神殿に礼拝しに来ていた人たちだったようです。一度に十八人が亡くなるのですから、大変な事故です。そこで、やはり多くの方が考えました。あの人たちは何か悪いことをしたので、それで天罰が下ったのではないか。

2 罪が深かったのか？

イエスはこれらの災害についてどのように考えておられたのでしょうか。2 節。「そのガリラヤ人たちがそのような災難を受けたから、他のどのガリラヤ人よりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。」4 節でも、「死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。」

つまり、どんな死に方をしようが、だからと言って特別その人だけが罪深いということには絶対ならない。罪の深さはみな同じである。そう言っています。

皆さんの周りに、あるいは身内の中に、不幸な死に方をされた方がいるかもしれません。その原因はいろいろでしょう。重い病気であったとか、悲惨な事故に巻き込まれてしまった、あるいは自死ということもあります。しばらくすると、死んだ人のことについてのうわさが残された家族の耳に入ってきます。心ないうわさが、傷ついた心をますます傷つけていきます。

また、自分の内側でも葛藤が消えません。病気でなくなったのであれば、もっと早く病

気を見つけることができたのではないかと自分を責め始めます。もし自死で亡くなったのであれば、自分をもっと早く気づいて上げるべきだったと自分を責めます。いつまでも苦しみか癒えることはありません。

もしそんなふう苦しんでいる方がいるなら、今日の箇所を思い出していただきたいのです。主はなんと言われたでしょうか。たとえ人の目に普通ではない死に方で亡くなることがあっても、それはその人の罪が重いからとか、そう言ってくださっています。苦しんでおられる方がいるなら、まずそこで心の荷を降ろしていただきたいと思います。

3 たとえ話

イエスは続けてたとえ話をはされます。その内容を見ていきます。

話の筋は非常に単純です。ぶどう園の主人はいちじくの木を植えます。ところが三年間待ったけれど実がなりません。実がならないものをつまでも植えていても無駄です。主人は切り倒すことにします。ところがそこへぶどう園の番人が登場してこう言います。「ちょっと待ってください。一年だけ時間をください。肥料をやってみますから、そうしたら来年実を結ぶかもしれません。もしそれで実を結ぶことがなかったなら、そのとき切り倒してください。」

そういう内容です。このたとえ話でいったい何を語ろうとしているのでしょうか。ぶどう園の主人とは誰か。ぶどう園の番人とは誰か。まずそこを確認します。ぶどう園の主人とは父なる神、ぶどう園の番人とは、主イエス・キリストを指すと考えたらどうなりますか。

父なる神は、いちじくの実がなることを待っています。ところがなかなか実がならな

い。気になるのは「実」とは具体的に何を指すのか。そこです。このたとえ話のポイントは、実がなるかならないかにありそうです。たとえ話は、5節からつながっています。そうしますと、私たちが悔い改めること、それが「実」ということになります。

イスラエルの人たちは、事故や災害で死んだ者たちのことを聞いて、あの人たちはずいぶん罪深かったに違いないと決めつけました。考えてみると不思議な行動です。なぜ、決めつけたくないのでしょう。私たちも同じことをしています。そんな自分をふり返ってみると、決めつけるとどこかで自分が安心できるからではないですか。無事に過ごしているということは、自分は罪深くないのだ。そう考えると自分が安心できます。そうなると、ますます罪を悔い改める必要を感じません。そんなわけですから実を結ぶはずはありません。

ぶどう園の主人は三年待ちました。「三」という数字には、十分に長い時間、忍耐して待ち続けた、そのような意味が込められています。もしそこで、ぶどう園の番人の申し出がなかったなら、とっくの昔に私たちは切り倒されていました。でもたとえ話の中で、ぶどう園の番人として登場する主は、父なる神にもう少し待ってくださいと、願い出ました。「なんとか肥料をやってみますから、そうしたら実がなるかもしれません。」

4 イエス

1) ガリラヤ人

このたとえ話で、いったいイエスはなにを伝えようとしたのでしょうか。

意外なところにヒントがあります。1, 2節です。そこにガリラヤ人ということばに着

目します。何度繰り返されていますか。三度です。先ほども言いました。たまたまではありません。「三」という数字に意味があります。どんな意味でしょう。イエスの出身と関係があります。イエスはどこの出身でしょうか。マタイ 26 章 69 節にこうあります。「ペテロが外の中庭にすわっていると、女中のひとりが来て言った。『あなたも、ガリラヤ人イエスといっしょにいましたね。』」間違いなく人々は、イエスはガリラヤ出身であると認めていました。

イエスにとって、ガリラヤ人は他人ではありません。ピラトに殺されたガリラヤ人のことを、まるで自分のことのように考えておられます。

2) エルサレムで死ぬ

では、シロアムの塔が崩れて死んだ人たちのことはどうでしょうか。事故にあったのは、エルサレムの神殿に礼拝しに来ていた人たちです。4 節をもう少し原文に即して訳すとこうなります。「シロアムの塔が十八人の者たちの上に倒れ、塔がその十八人を殺した。」

のちに主は、エルサレムで殺されていきます。そうするとここも同じではないですか。シロアムの事故で死んだ者たちは、イエスと無関係ではない。やがて自分がたどっていく道を重なるところにいる人たちである。主はそうようにお考えになっています。

3) 切り倒されるイエス

殺されたガリラヤ人、エルサレムで事故に巻き込まれて死んだ人たち。このこととイエスはどのように関係するのでしょうか。

たとえの 9 節で主は、「もしそれで来年、実を結ばよし、それでもだめなら、切り倒

してください」と言われました。肥料をやる。具体的に言えば、福音を語り、奇蹟を起こされ、人々を悔い改めに導こうと一生懸命努力されました。弟子たちが増えたかに見えました。ところが、人々はイエスを見捨てます。弟子たちも逃げます。人は悔い改めようとはしないままでした。実を結ばなかったのです。

その結果、だれが切り倒されたのですか。私たちですか。いいえ、主です。主が代わりに十字架で切り倒されました。

だれがもっとも罪深いのでしょうか。人々は、悲惨な死に方をした者だと考えました。先ほど言ったことと正反対のことを言うようですが、主に限って言えば、まさにそのとおりです。

最も悲惨な死に方をされた主こそ、最も罪深い者の姿をとってくださいました。なんのためにでしょう。悔い改めようとしなさい、私たちが滅びから救い出すためにです。神が私たちに対して、へりくだり、弱くなり、低くなられて、「どうか滅びから救われてください」と手を合わせてお願いしているような私たちです。